

## ハワイ日系移民の物質文化研究の視点

—アメリカ合衆国における研究動向との関連で—

後藤 明\*

### はじめに

本稿はハワイの日系移民の物質文化を研究する視点について考える。私がとくにこのテーマを選んで論ずる目的の一つは、移民の民俗学的研究の関心を喚起することである。日本の民俗学はよくいわれるように一国民俗学として発達してきた。しかし最近になって日本文化の起源あるいは地方差を理解するためには、広く周辺地域との比較が必要だと認識が高まってきた。しかし私は日本人の民族性を理解するために、外国に出て行って異民族と接した移民の問題も比較民俗学のテーマとして重要であることをつけ加えたい。日本人というものを理解するために、不慣れな環境で日本人がどのように行動し、文化伝統を維持し、また変容していくかを知る必要もあるからである。また移民社会では、沖縄と東北のような日本ではまったく異なった地方に住む人々が小さな移民社会を形成するため、日本人の地方差がかえって強調されることもある。つまるところ、移民社会には、異なった環境的・社会的脈絡のなかで日本人のものが凝縮して現われると思うのである。以下本稿では、物質文化研究のなかでとくに民族境界の問題を概観し、ハワイ日系移民と他民族の間の民族境界をどのように物質文化の中で追求すべきかを考える。

### 1. ハワイ日系移民の研究

日本から最初の移民がハワイの土を踏んだのが

明治元年である。しかし彼らは幕末の混乱時に日本を脱出した人々で、正式の移民、つまり官約移民が始まったのは、1885（明治18）年のことである。その後移民の制度が私約、自由移民、呼び寄せ移民に変わるなど変化はあったが、1924（大正13）年に移民が禁止されるまで、約20万人の日本人が渡った。移民は西日本からが多く、なかでも山口、広島、熊本、そして沖縄が多い。この間日本に帰国する者、アメリカ本土に渡る者などがあり、約5割の者がハワイに止まった。1985年には、ハワイで官約移民百年祭が盛大に催された。このときはさまざまなイベント、移民資料館の設立、テレビや各種報道機関の日本・ハワイでの取材、日英両言語による出版物ブームなど、日系移民に対する関心が、ハワイと日本の双方で高まった。しかしそれから5年たった現在、ハワイの日系移民研究は必ずしも望ましい状態とはいえない。たとえば、ホノルルのピショップ博物館に設置された移民資料館は現在閉館されている（本土のロサンゼルスでは移民資料館が準備中であるが）。また移民初期のことを記憶する一世・二世の高齢化といった理由による聞き取り調査の困難化も進行している。アメリカのカリフォルニア州では中国系移民に関する歴史考古学の蓄積もあるが（Schuyler 1980）、アメリカ本土、あるいはハワイ州でも日系移民に関する考古学的調査は本格化していない。

初期移民の研究の方法には、まず歴史学的なものがある。これは公的な文献、たとえば外交文書、パスポート、ハワイ王国やハワイ共和国時代の統

\*宮城学院女子大学助教授／筑波大学非常勤講師

計資料などに基づくものである（児玉 1989）。第二に口頭伝承（オーラル・ヒストリー）の調査がある（Komada-Nishimoto et al. 1984）。初期移民の日常生活に関する文献資料はあまりないので、この聞き取り調査は貴重な情報源である。ハワイ大学のエスニック・スタディーズやビショップ博物館員による調査や録音テープの蓄積がある。三番目としてはここでのべる、物質文化研究である。

## II. アメリカの物質文化研究

元来移民で成立したアメリカ合衆国の歴史時代研究の主要テーマのひとつは、さまざまな民族の伝統の維持と変容の追求にあった。そしてヨーロッパや日本との間に学問の枠組みに違いもあるが、アメリカ史における物質文化研究はさまざま

表1 アメリカ合衆国における物質文化研究の動向（その1）  
(Schlereth 1982: Table 1.2 Part 1)

	美術史 (Art History)	象徴主義者 (Symbolist)	文化史 (Cultural History)
主要な学問的視点 (main disciplinary perspectives)	建築史, 装飾芸術史	アメリカ研究, アメリカ文学	歴史考古学, 文化人類学, 実験考古学 フォークロア
人工物への興味 (usual artifact interest)	芸術や装飾芸術の傑作	公共的・市民的記念碑, イコン, 流行文化	村落の前産業的・農民的物質文化
歴史の規定 (definition of history)	個人の伝記とその作品	思想, 神話, 象徴想像力の歴史	過去は真実で現在に再生, 復元, 再確認できる
解釈の目的 (interpretive objective)	芸術対象の歴史的発展と固有の利点の確認	過去の人工物の抽象的および具体的な意味の叙述	特定の歴史的過去を発見するための全ての資料の集約
主な研究方法 (frequent research methods)	西洋美術の定評ある作品の分析	物体の事実であり象徴でもある2重性格の発見	野外調査, 歴史考古学, 民俗生活の聞き取り
出版・提示型式 (publication and presentation formats)	博物館展示目録, 特定の人工物展示伝記, 時代の部屋	モノグラフ, 古戦場, 一時的展示	野外調査レポート, 歴史建築の修復, 野外博物館, 村でのリクレーション

な分野で行なわれてきた。それは美術史、建築史、文学・文芸評論、文化人類学、民俗学、歴史考古学、博物館学などであるが、これらの統合的様相をもつアメリカ研究学科（アメリカン・スタディーズ）にとくに研究者が多い（Ames 1977；Bronner 1985, 1986；Glassie 1969, 1989；Gould and Schiffer 1981；Quimby 1980；Reynolds and Stott 1987；Schlereth 1980, 1982b, 1985；Schuyler 1980；South 1977）。

学史的論文（Schlereth 1982a）によると、1960年代以前のアメリカにおける物質文化研究は、美術史や技術史的なもの、つまり人文科学的傾向をもつ研究が中心であった。これらの研究の目的は、ヨーロッパ的伝統の継承の確認と、さらにはその伝統を離れて独自の歴史を歩み、自動車や飛行機を産みだしたアメリカ文化の威信の追求であったといえる。また民族境界の物質文化的研究においては、文献に記載された多数のエスニック・グル

表2 アメリカ合衆国における物質文化研究の動向（その2）  
（Schlereth 1982: Table 1.2 Part 2）

	環境主義的 (Environmentalist)	機能主義的 (Functionalist)	象徴主義的 (Symbolist)
主要な学問的視点	文化／歴史地理学、 地域生態学、 文化人類学	技術史、文化人類学 民俗生活研究、 実験考古学	民俗生活研究、 民族誌／言語学、 文化人類学
人工物への興味	すべての景観的 特徴、とくに 住居	技術システムの すべての要素	土着の民俗住居、 流行文化資料
歴史の規定	文化的景観に示さ れた文化変化	理性的発展、適応 道具としての技術 の継承と機能	過去のコミュニケー ション・システムに 発見される過去の行動
解釈の目的	空間ごとの 文化的適応の叙述	人間に技術の時間 的進化の説明	人間の意識を構造化 する基礎的な普遍 様式の確認
主な研究方法	一地域での人工物 伝播の概念を検証 する野外調査	対象の有用性と実用 性を検証するための 野外調査と実験	物理的資料の「人工 物文法」を発見する ための野外調査
出版・提示の型式	民俗生活／人類学 博物館、モノグラフ 文化地図	工芸展覧、技術博物 館展示、実験考古学	モノグラフ、 一つのジャンルの 人工物展示

ープの存在や移動経路を物的証拠から確認するといった、文化史的研究が多かった。

しかし、1960年代を境に新しい動向が現われる。上記の学史的論文では、1965年から80年代初頭の間における、物質文化研究の動向が三つの表によってまとめてある(表1~3)。これらの研究傾向の一つ一つは決して「学派」を形成している

わけでもなく、相互に排他的なものでもない。むしろ研究動向を理解するための異なった断面と理解すべきである。たとえば歴史建築の分析に言語学的モデルを導入して一世を風靡したグラッシー(Glassie 1975)の研究は第2断面(表2)では構造主義の代表といえるが、同時に第3断面(表3)では行動主義の先駆でもあった。

表3 アメリカ合衆国における物質文化研究の動向(その3)  
(Schlereth 1982: Table 1.2 Part 3)

	行動学的 (Behavioralistic)	国民的性格 (National Character)	社会史 (Social History)
主要な学問的視点	民俗学, 民俗科学 心理歴史学, 認識 人類学, 環境的・ 社会的心理学	哲学史, 技術史 ホイッグ・マル クス史学	家族史, 女性史, 労働史, 黒人史, 都市史
人工物への興味	民俗芸術, 食生活 空間的構造物, 世帯的人工物, 写真	すべての物質文化 しかしとくに技術	非エリートの遺物, 検認済遺言書, 在庫 目録, 遺言書
歴史の規定	伝記, 現在の活動	国民的性格, イデオロギー	社会構造のなかの 集団的伝記の進化
解釈の目的	人生段階と行動の 社会的プロセスの 探求	あらゆる国民的 性格のイデオロギー 構成の理解	社会集団, 階級, 制度内における庶民 の普段の活動の探求
主な研究方法	野外調査観察, 口頭伝承, 聞き取り 歴史的精神分析, 仮説検証	従来 of 学問(文献, 画像的・人工物的 証拠)の広い解釈 的枠組内での総合	計量的資料の統計 分析, 現代化のよう な説明的概念の検証
出版・提示の型式	民俗芸術展示, 話者 の聞き取り, 社会学・ 心理学的統計	歴史教科書シリーズ 分野を越えた博物館 展示, 恒常的な画廊 展示	モノグラフ, 生きた 歴史農場, 歴史建築 博物館

この表から読み取れることは次のような点であろう。最近の物質文化研究者は、文化人類学における生態学、構造主義、言語学モデルなどの影響をうけ、一方で物質文化の機能と環境条件との関係を問題にし、またもう一方では物質文化の形態の背後にある原理の追求を行なっている。さらに物質文化は、その時代の国民的イデオロギーあるいは世界観の表現としての役割をもつ、という象徴論的立場もみられる。

さらに本稿と密接に関わる点は、物質文化研究者の一部がフランスのアナール学派やイギリスの労働史・社会史の影響をうけて、社会科学的傾向を強めたことである。その結果、今まで無視されてきた都市部の流行文化や少数民族の民俗芸術をも対象にするようになった。そして物質文化と社会的脈絡（社会構造、地位・身分、社会制度）との関係が主たる研究目標となった。つまりエスニック・グループを並列に捉えるのではなく、それらの間、あるいはそれらの中の社会的地位や政治・経済的立場の相違が物質文化にどう現われるか、といった社会科学的視点が現われたのである。このような変化は別の角度からみると、作品としての物質文化そのものあるいは技術への興味から、それを作った人、彼らの属する社会集団、そして当時の社会的・文化的コンテクストへと興味が移っていたのだともいえる。

さて考古学に目を移すと、アメリカの先史考古学は文化生態学や新進化主義の影響で1960年代から文化適応や社会進化のような問題に関心を深めていく。そして文化史的傾向のあった歴史考古学もその影響で、歴史時代の社会階層化（民族内あるいは民族間の不平等の発生）や食生活といった社会進化的ないし生態学的問題（South 1977）に関心を移していく。そのさい歴史考古学者は先史考古学の概念や方法を借用する傾向が一時あったが、最近歴史考古学者の間には、先史考古学にも文献史学にもない、独自の概念と方法を開発しようとする試みも現われている（Beaudry 1988）。〈物質文化と民族境界の問題〉—先史考古学・民族考古学との比較—

先史考古学では、土器型式のような物質文化が民族や何らかの人間集団の領域を反映すると楽観的に考えられてきた時期があり、さらに1960年代のアメリカでは、土器の文様の分析から、過去の婚姻規則を復元しようという研究があった。それは、女が土器を作ると仮定できる場合、集落単位で土器の文様の継続性や分布を調べ、集団ごとに文様に連続性がみられるなら男が婚入する（妻方居住婚姻）、また集団間に文様の交換のような現象がみられるなら女が婚入する（夫方居住婚）、と考える方法である。

この方法は考古学者に一時衝撃を与えたが、すでにさまざまな批判もある。批判のひとつは、同じ人が土器を作っても、同じようにはつくらないことがあげられる。たとえば婚入した女が、かつていた集団でおぼえた風習をつづけるとは限らないということである。もしそうなら女の移動は物質文化のうえには痕跡を止めないことになる（後藤 印刷中）。筆者が調査したソロモン諸島でも、貝貨を作らないムラから作るムラに婚入してきた女性は、結婚後製作をおぼえ、また装身具も真似るため、ムラ出身の女性と区別つかないことを指摘した（後藤 1990）。

そこで社会行動と物質文化の間関係を再検討することが必要になってきた。しかし従来の民族誌からはそのような情報はほとんどえられないので、伝統的生活を保持する人々の間に入り、彼らの行動と物質文化との間関係を調査し始めた考古学者がいる。このような研究分野を民族考古学という。以下二人の例をあげる。

イギリスのホッター（Hodder 1982）はケニア・バリンゴ湖周辺の三部族の間の物質文化の調査をした。三部族は同じような生計や社会組織をもつが、服装や女の耳飾りなどに大きな違いがある。これを見ると三部族の間に交流はあまりないようにも思える。しかし実際嫁入りや放牧によって境界線をこえることはよくある。そのような場合、他部族に入ってきた人は服や飾りを取りかえる。嫁入りしてきた女などは耳飾りや首飾りを替えてしまうのである。

長老支配が強いこの地域では、女たちは日頃の服装や身体装飾において、部族の規範に従うべしという圧力がある。婚入してきた女たちが装飾を変えてしまうのはこのためである。しかしあまり社会の表面にでない瓢箪の装飾においては、このような圧力は弱い。そのため装飾は自由で、部族の境界をこえて家族や婚姻の関係をよく示すというのである。槍先はまた違った分布パターンを示す。槍は男のもちもので、鉄製の槍先は三部族の間で、ほとんど形態に差がみられない。槍は現在、狩猟や戦闘にはほとんど使用されない。にもかかわらず、若い男は槍をもち歩く。もともと槍は勇猛なマサイ族のものを模倣したもので、槍は一種の男性原理の象徴とされている。そして若い男のもつ槍は、この社会の長老支配に対する抵抗を表すと思われる。若者たちは部族をこえて共通の槍を所有することによって、自己主張を行なっているのである。アメリカのウイスナー（Wiessner 1984）による、プッシュマン研究も興味深い。彼女は、スタイルには紋章的スタイルと主張的スタイルの二種類を定義する。前者は意識的な、集団への帰属を表すものである。したがって紋章的スタイルは集団間の境界を反映する傾向がある。一方、主張的スタイルは個人に基づき、個人を主張すると同時にその人が属するさまざまな集団への帰属を表す。たとえば流行の帽子をかぶって個性を主張すると同時に、モダンな集団への帰属を示すような場合を指している。主張的スタイルの方は、集団間の交流を反映する傾向があるろう。

紋章的スタイルを表す例として、男たちが狩猟に使う弓矢がある。鉄製のヤジリの形態は、言語族レベルで顕著な形態差がある。言語族間のこのようなスタイルの発達は、競争や争いの結果ではなく、むしろひとつの言語族のなかに存在するいくつかのバンドを統合する必要性からきているようだ。つまり砂漠の狩猟という不安定な活動を克服するため、いくつかのバンドが危険をプールしあい、狩猟に失敗しても、同じヤジリを使う仲間分け前にあずかれるというわけである。

一方女たちが作るヘッド・バンド（装飾された鉢巻き）はヤジリと異なった様相をみせる。ヘッド・バンドはビーズを縫い付けてつけた模様がある。模様にもちいられる幾何学的モチーフはプッシュマン全体に共有されているが、モチーフの頻度や図と地の組合せなどには、言語族間に差が見られる。差は北部地域でみられるが、南部ではみられない。北部ではヘッド・バンド製作がさかんで、女たちは頻繁に一緒になって作る。その過程で、よく接触する近くの近親者や友人との間に居住地的様式が形成される。しかし南部ではヘッド・バンドづくりがさかんでなく、居住地的様式は発達しない。

しかし地域的様式の違いは交流の度合いだけでは説明できない。たとえば比較的裕福な暮らしをしている隔離地区では、人々は独自の様式を発達させて、自分たちのアイデンティティーを高めている。しかし他の地区の人々に贈り物をするときは、優越感を表さないように、相手の集団の様式に合ったヘッド・バンドをもっていく。つまりヘッド・バンドは個人と集団あるいは、集団の間関係を維持するための、社会的な戦略なのである。弓矢はきわめて社会的なもので、規範への従属と個人的・地域的（バンド内部）差異を低下する役割をもつ。一方ヘッド・バンドの模様は個人レベルでの集団への帰属を表現する役割をもつ。個人は一定のレパートリーのなかから模様を選択することによって、一方で個性を主張するが、同時に集団への帰属を示すのである。

上に述べた民族考古学研究は次のような見解をもたらす。物質文化にはさまざまな種類あるいはレベルがある。たとえばウイスナーのいう紋章的および主張的スタイルである。それはさまざまなサブ・カルチャーに対応する。サブ・カルチャーとは男・女、長老・若者、婚入者・ムラ出身者などである。「若者文化」のようなサブ・カルチャーが集団を越えて存在し、彼らが共通の物質文化を身につければ、物質文化から集団の領域を推定するのは困難になる。あるいは社会的戦略としての物質文化は、集団の差や社会の矛盾を強調した

り、逆に和らげたりする（後藤 印刷中）。

対象とする社会の状況が違うものの、アメリカ現われている。アメリカの物質文化研究も、初期のころは移民各集団と物質文化の比較的単純な関係——たとえばフィンランド移民とアメリカ東部のサウナ風呂の分布——を探ってきたといえる。しかし民族境界が、民族誌や文献などの情報がえられる歴史時代においても、直接的に物質文化に対応しないという指摘がなされてきた。

グラッシー（1969）やディーツ（Deetz 1977）は東部の研究に基づき、民俗文化（folk culture）と流行文化（popular culture）を区別している。民俗文化とは地域に根ざした、変化の遅い文化である。アメリカの移民初期には、ヨーロッパ諸国からきた移民が、それぞれの地方に入植した。このような状況では地方差が民族差に対応しており、農具などは民俗文化の例となる。一方流行文化は急激に広まり、地域をしばしば越える文化を意味する。ディーツらによるアメリカ東部（マサチューセッツ）の墓石の研究では、墓石スタイルの流行が、宗派やエスニシティを越える現象が指摘されている。しかし民俗文化と流行文化は排他的なものではなく、民俗文化が急激に流布して流行文化になったり、逆に流行文化が特定地域で根付いて民俗文化になったりする例は、グラッシーが農具や楽器の例で示している。

もうひとつ、指摘されているのは、民族境界の時間的変化である。民族境界が、言語なり人間行動なりにいつも同じように反映されないと同時に、物質文化にも現われない。つまりある時代に境界を反映していた物質文化が、次の時代にも反映するとは限らないのである。それは民族境界自体の変化と、物質文化の役割の変化の相互関係からくると思われる。マクガイヤー（McGuire 1982）は歴史考古学者は物質文化と民族性の関係を静的にのみ捉えてきて、いかに民族境界が生まれ、固定化され、変化するかという問題設定を怠ってきたと批判する。彼は、民族性だけが物質文化に反映される社会的属性ではなく、地位、威信、宗教、職業なども関係するという。そして彼はエスニッ

ク・グループ間の競争、エスノセントリズム、そして権力関係の三つの変数が民族境界の問題を追求するさい重要であるとしている。

### III. ハワイにおける日系移民の物質文化研究の現状と問題

＜歴史考古学的研究＞ハワイでおこなわれる考古学的発掘調査の大部分は、先史時代（ハワイ人）の遺跡の調査である。接触後（18世紀の末）の遺跡・遺物はその過程で偶然発見され、報告書で簡単な記載がなされることが多い。とくに過去百年前後の移民時代の遺跡・遺物に関しては、体系的調査・分析がなされたことはほとんどない。例外はオアフ島西部・マカハ谷の中国人の住居の調査である（Riconda 1972）。ただしこれも、先史時代のハワイ人の遺跡の調査の過程で発掘されたものである。またハワイ島最南端のサウス・ポイント付近の考古学的報告書（Sinoto and Kelly 1975）では、ハワイ人の住居遺跡である石囲いの基壇を、後に日系人が住居として利用したことが記されている。なお私はこの遺跡からの発掘遺物を観察したが、日系移民のものと断定できる資料は発見されていない。日系人をはじめ、各民族の存在を明確に示す遺物は、起源や使用時期の比較的明確な貨幣、ガラス瓶、陶器などであろう。これらの出土状況や分布は、各民族の交流を探るうえで貴重である。オアフ島の東部内陸の考古学的調査では、「快治液ヌリグスリ」、「生盛薬劑」および「大日本麦酒株式会社醸造」と記された、おそらく日本から輸入された製品のガラス瓶が発見されている（Allen 1987 Table 21）。この報告書では、この付近でかつて農業を行っていた日系人への聞き取り調査結果も掲載されている（Allen 1987 : Appendix 1）。今後このような発掘と聞き取りあるいは文献調査を平行しておこなう調査の進展が望まれる。同時に初期移民のキャンプ、住居あるいは農地などを発掘し、人工遺物のほかに動植物遺存体が発見されれば、食生活を初め、日常生活の詳細を明らかにできる可能性がある。

<民具研究> 日系人が持ち込んだ道具の消長、日本的な道具とハワイ式あるいは西欧式の道具の影響関係などが重要な問題となる。日系人の場合、開拓者としてではなく、プランテーション労働者としてハワイに行ったわけで、生活用具の一部はすでに与えられる立場にあった。しかし彼らが日本から持ち込んだ道具類も多数あった。それらに関する少ない研究例として、大工道具の研究、漁具の研究がある。

大工道具の研究では、日本式の道具が日系移民の需要（寺院、漁船家具など）に支えられて使用され、しだいにアメリカ式の道具と融合する過程が示された。鋸、ノミ、カンナ、墨壺などに関しては当初日本の大工道具が使用された。しかし材料である木材を入手するとき「フィート」や「インチ」で交渉をするために「尺」や「寸」では都合がわるく、物差類に関しては西洋式のものが使われた。また金槌や木槌は鋸と違い、使い方も似ているし、ハワイでは釘が多用されたため、すぐ西洋式のものが入り入れられた。そして鋸でも、荒切りをするための大型の西洋鋸は使われた。一般に家を建てる時の例をあげると、棟上げや床・壁に関する大まかな仕事は西洋式の道具がすぐ使われるようになったが、仕事が戸、窓、箆筒に及ぶと、繊細な作業のために日本式の道具が使用された（Goto et al. 1975）。

漁具の研究では、ハワイの海という共通の生態系を利用するさまざまな民族が、それぞれの伝統に沿ってどのような漁業を行っていたかが焦点となる。当時の基幹産業のサトウキビ栽培と違い、白人があまり重きを置かなかった漁業という周縁的活動に、かえって各移民の民族性が現われているようだ。ハワイ人と日系人は、それぞれ伝統的な釣り漁法を用い、カツオや底魚を中心とする漁業を行なった。日系人はカツオ釣の擬餌針やタイなどの一本釣の漁具、そしてカツオ漁船を持ち込んで漁を行なった。また中国人は養殖漁業、フィリピン人は網漁業といった独自の漁法を用い、ハワイ人や日系人とは違った漁場と資源を開拓していたのである。このような状況は、生態学と民族

性の接点に位置する問題を提示する（後藤 1989）。

<文化財研究> これは神社・寺院や石造物（石仏、灯籠、墓石など）の研究である。寺院の建築は時代、宗派による外形、内部構造の違いを追跡でき、その社会的背景と関係づけることが可能である。同時に建築過程を記した古い写真や日記・手記の利用、建築に携わった人への聞き取りなども進めるべきである。中国系移民に関しては、聞き取り調査も入れた「文化財の分布調査」プロジェクトが生まれているが（Char and Char 1983）、日系人に関しても、同様の試みを早急に行なう必要がある。

寺院建築で重要なのは、様式の時間変化と社会的背景との関連である。初期の頃はできるだけ伝統的様式に沿って作っている。多くの日系人がハワイで一稼げして「故郷に錦を飾る」という希望をもっていた時期である。故郷への郷愁が強いこの頃の寺院には、日本から大工を呼んで建てられたものもある。1930・40年代から、アメリカのライフ・スタイルの浸透で、しだいに内部は教会のように土足であがり長椅子に掛ける型式になる。また外形もキリスト教会に対抗して、コンクリート造りのヒンズーないしイスラム様式を採用する寺院が現われる。「優れたアメリカ人としての日系人」が目指された時期である。最近10年間では、アメリカ人自身の東洋思想への興味、また日系仏教寺院のカルチャー・センター的機能の増大と相俟って、様式変化が起こりつつある。日本語を解しない3世以降の世代が台頭し、今後の日系人社会の動向の予測は容易ではないと同様に、建築様式の変化も多様化しており動向が掴みにくいのが現状である。

初期移民の墓石には、漢字で名前や命日、死亡年令に加え、出身地が明記してあることが普通である。このような墓石からは、移民の人口構造（出身地、性別、死亡年齢）に関する情報がえられる。また出身地と個人名に関する情報は、パスポートなどの公的文書とつきあわせれば、個人のハワイでの動きを追跡できる可能性をもたらす。

さらに墓石の形態には、埋葬された人の民族、

宗教、宗派、出身地、社会階層、年齢、性別といったさまざまな社会的属性が反映される。このため墓石は、民族境界と交流の問題、一つの民族内部での社会的関係といった問題に接近するための貴重な情報源である。墓地や墓石を分析する視点には、次のようなものが考えられる。

第一に、初期移民の埋葬されている墓地の立地が問題となる。プランテーション・キャンプやその周辺につくられた日系寺院との位置関係、また現在の集落との関係などである。それは、地理学では歴史的人工物としての日系人的景観、考古学ではセツルメント・パタンの追求につながる。また日系墓地と他の民族の墓地の位置関係も確認する必要がある。アメリカ東部で墓石を研究したデスレフセン (Dethlefsen 1981) は、黒人の墓地の分離、あるいはモラビアンとかクエーカーなどの特定宗派の人々の分離を指摘している。同様な問題はハワイのように多様な民族と宗教の入り乱れる地域でも追求されるべきだろう。

第二に、墓地内部での墓石の分布が問題である。私のホノルル市内およびハワイ島東海岸部における調査によると、初期は日系人と他の民族が区別されていることがわかる。日系人墓地には仏教徒・キリスト教徒双方が埋葬されているが、日系人内部の宗教の違いより、日系人と中国人あるいはポルトガル人といった民族集団の違いの方が、同一墓地内部の墓石分布の差に現われる。また日系人のなかでは、沖縄出身者の墓石がクラスターをなす傾向にある。

第三に、墓石の型式が問題である。日系のものに限っても、墓石にさまざまな型式(形態、製作方法、材質など)がみられる。それが日系人の文化伝統や社会的属性とどう関連するかが問題である。日系人のなかで出身県・地方の埋葬風習がどう反映されているか、石材の入手経路、専門の石工の存在、日本からなにをもってきているか(墓石の材料のみか完成品か)などを確認する必要がある。また一つの型式の墓石(例 地蔵型の容像墓標)でも、信仰、流行、日本およびハワイでの地方差、あるいは個人の活動(例 石工)などを

追求できる。

<研究視点>上へのべてきた日系人の民族性を物質文化にいかにかみるか、あるいは日系人と他民族の境界や交流をどのようにみるかといった問題を、II, III 節にのべた研究動向と関連させてまとめてみると次のようになる。

1. 日系人の食生活(例 歴史考古学の自然遺物の研究)、日用品(例 調度品、食器など)、そして漁師や職人の道具類(例 漁具や大工道具)などの、いわばライフ・スタイル的問題がある。これは、日本の民俗文化がどう維持され、また変容していったかという問題の追求である。

2. エスニック・グループごと、あるいはそれら内部のサブ・カルチャー(例 日系人の各仏教宗派)の、象徴的でより「公的」表現の問題がある。例としては宗教建築物や墓石の問題があげられよう。表現の時間的変化と社会コンテクストの追求も重要である。

3. 起源は限定されるが、おそらく流動性の強いガラス製品、貨幣、装飾品などの分布や共存状況からみた民族の交流の問題。このような物質文化は流行文化としての分析が必要であろう。

<日本での調査の重要性>日系移民の物質文化調査は日本でも行なう必要がある。たとえば日系の漁民が使っていた漁具は日本から持ち込まれたものが多い。どこから、なぜ、どのような形でもちこまれたかを調べ、また当時の道具の形態などを日本に残っている資料で調査することが可能である。たとえば、日系人の使用していた釣針などは、和歌山県・田辺市や山口県・周防大島(沖家室)の漁具店から供給されていたものがある(後藤 1989)。

逆に移民が日本に送ったり、帰りの人がハワイからもち帰った物質文化を調査する必要がある。このような資料が貴重なのは、もち帰った年代がわかる場合があり、その物質文化が年代づけられる可能性があるからである。日用品はどんどん新しいものにかわり、古いものは消えていくが、ハワイである時期にしか使われなかった物質文化が、日本に持ち込まれて保存されているケースが

ある。移民を多くだした地域の博物館（例 山口県・周防大島内の町立博物館）や公民館（例 和歌山県・串本町田並公民館）にはそのような資料を展示するものもみられ、また個人的に保存している人もいる。移民帰りの人々やその家族・親族も高齢化しているので、各市町村に働きかけて、「移民資料コーナー」のようなものを設置し、早急に資料の収集・記録に努める必要がある。

## 引用文献

- Allen, Jane (ed.)  
1987 *Five Upland 'Ili : Archaeological and Historical Investigations in the Kane'ohe Interchange, Interstate Highway H-3, Island of O'ahu*. B. P. Bishop Museum, Department of Anthropology Report Series 87-1.
- Ames, Kenneth L.  
1977 *Beyond Necessity : Art in Folk Tradition*. The Winterthur Museum, Delaware.
- Beaudry, Mary C., (ed.).  
1988 *Documentary Archaeology in the New World*. Cambridge University Press, Cambridge.
- Bronner, Simon J.  
1986 *Grasping Things : Folk Material Culture and Mass Society in America*. The University Press of Kentucky, Lexington.
- Bronner, Simon J. (ed.).  
1985 *American Material Culture and Folklife : A Prologue and Dialogue*. UMI Research Press, Ann Arbor
- Char, Tin-Yuke and Wai Jane Char (eds.)  
1983 *Chinese Historic Sites and Pioneer Families of the Island of Hawaii*. University of Hawaii Press, Honolulu.
- Deetz, James.  
1977 *In Small Things Forgotten : The Archaeology of Early American Life*. Anchor Books, New York.
- Dethlefsen, Edwin S.  
1981 The cemetery and culture change : Archaeological focus and ethnographic perspective. In : R. A. Gould and M. B. Schiffer (eds.), pp.137-159.
- Glassie, Henry.  
1969 *Patterns in the Material Culture in the Eastern United States*. University of Pennsylvania Press, Pennsylvania.
- 1975 *Folk Housing in Middle Virginia : A Structural Study of Historic Artifacts*. University of Tennessee Press, Knoxville.
- 後藤 明  
1989 「ハワイ日系移民の漁具と南紀地方のケンケン漁法」 『民具研究』84  
1990 「貝貨の民族考古学」 『現代思想』18(12) : 128-137.
- 印刷中 「考古学からみた民族」 岡正雄・江上波夫・井上幸治編 『民族の世界史 第1巻 : 民族とは何か』 山川出版, 東京。
- Goto, Hisao, Kazuko Sinoto, and Alexander Spoehr  
1983 Craft history and merging of tool traditions : carpenters of Japanese ancestry in Hawaii. *The Hawaiian Journal of History* 17 : 156-184.
- Gould, Richard A. and Michael B. Schiffer. (eds.).  
1981 *Modern Material Culture : The Archaeology of Us*. Academic Press, New York.
- Hodder, Ian.  
1982 *Symbols in Action : Ethnoarchaeological Study of Material Culture*. Cambridge University Press, Cambridge.
- 兎玉正昭  
1989 「明治後期のハワイ移民と移民社会に関する研究——領事報告からみたハワイ

- 移民」 昭和62・62年度文部省科学研究費補助金研究成果報告書
- Komada-Nishimoto, Michi, Warren S. Nishimoto, and Cynthia A. Oshiro (ed.)
- 1984 *Hanahana : An Oral Anthology of Hawaii's Working People*. Ethnic Studies Oral History Project, University of Hawaii, Honolulu.
- McGuire, R. H.
- 1982 The Study of Ethnicity in Historical Archaeology. *Journal of Anthropological Archaeology* 1 : 159-178.
- Quimby, Ian M. G. and Scott T. Swank. (eds.)
- 1980 *Perspectives on American Folk Art*. W. W. Norton and Company, New York.
- Ridonda, D.
- 1972 Historical archaeology of Makaha Valley. In : E. Ladd and D. Yen (eds.) *Makaha Valley Historical Project : Interim Report No.3.*, pp.3-22. Pacific Anthropological Records 18.
- Reynolds, Barrie and Margaret A. Stott. (eds.)
- 1987 *Material Anthropology : Contemporary Approaches to Material Culture*. University Press of America, Lanham.
- Schlereth, Thomas J.
- 1980 *Artifacts and the American Past*. The American Association for State and Local History, Nashville.
- 1982a Material culture studies in America, 1876-1976. In : Schlereth (ed.), pp. 1-75.
- Schlereth, Thomas J. (ed.).
- 1982b *Material Culture Studies in America*. The American Association for State and Local History, Nashville.
- 1985 *Material Culture : A Research Guide*. University Press of Kansas, Lawrence.
- Schuyler, Robert L. (ed.).
- 1980 *Archaeological Perspectives on Ethnicity in America : Afro-American and Asian American Culture History*. Baywood, New York.
- Sinoto, Yosihiko H. and Marion Kelly
- 1975 *Archaeological and Historical Survey of Pakini-mui and Pakini-iki Coastal Sites : Waiahukini, Kailikii, and Hawea, Ka'u, Hawaii*. B. P. Bishop Museum, Department of Anthropology Department of Anthropology Report Series 75-1.
- South Stanley (ed.).
- 1977 *Research Strategies in Historical Archaeology*. Academic Press, New York
- Wiessner, Polly
- 1983 Style and social information in Kalahari San Projectile points. *American Antiquity* 48 (2) : 253-276.
- 1984 Reconsidering the behavioral basis for style : A case study among the Kalahari San. *Journal of Anthropological Archaeology* 3 : 190-234.
- 1990 In there a unity to style ? In : M. Conkey and C. Hastorf (eds.), *The Uses of Style in Archaeology*, pp.105-112. Cambridge : Cambridge University Press.